戦後から飛騨天文台草創期の附属天文台

松井 宗一
元京都大学飛騨天文台技官

1. 戦後混乱期の“花山天文台”

1946年8月末に初めて、西村繁次郎氏の案内で花山天文台を訪ねることが出来た。残暑厳しい頃なので、夕方から出かけようということになった。

自転車で出発し、京津線九条山電停の踏切を右折して、花山道路に入るといきなり急坂となり、最初の左折箇所が“トレミーカーブ”、しばらく行くと右手に熊笹の生い繁った谷が“オーマー谷”という所で、これから登っていく“ケプラーポイント”への近道になっていると教わった。

“ケプラーポイント”の辺りには、旧陸軍の伏見工兵隊が“花山道路”を作ったという記念碑が建っていた。汗だくになりながら、将軍塚への分岐点から直進した辺りは当時赤松林で、昼間でも薄暗くて気味の悪い所であった。そろそろ“ニュートンドロップ”やと言われた地点で、右手の丘の上に大ドームが、夕日に照らされていたが、余り輝いてはいなかった。良く見ると、緑、茶、黒、の迷彩色が施されていた為であった。

後日聞いたところによると、戦時中天文台敷地の南側に高射砲陣地があったので、軍の要望で塗装されたとのことであった。

ようやくたどり着いた本館の窓に向って西村さんが「三谷さーん」と大声で呼びかけられたが、返答がない。西村さんが、多分、九条山の浜野たばこ店へ新聞、郵便物を受取りに行かれたのだろうから、しばらく待とう。途中で出会わなかったのは、“オーマー谷”の近道を下りて行かれたのだろう。とおっしゃった。小一時間程して三谷さんがお帰りになり、研究室へと案内された。三谷さんの第一印象は眼光鋭く、この人は筆者より4、5才くらい年上のように思われて、少々近寄り難い“オーラ”を感じた。恐る恐るその事も含めて話しかけて見ると、いつもその点で初対面の人に誤解されて、損をしているようだと苦笑いされた。話しているうちに、同い年の大阪生れとわかり、やっと気が楽になった。その夜当時出現していた二つの彗星、（1946a）Timmersと（1946c）Giacobiny-Zinnerとを、クック30cm屈折で見せてもらい、天文台を後にした。

この日の出会いがきっかけとなり、天文台へ出入することが出来るようになった。

“花山天文台”この優雅な名称が、ふさわしく思えるのは、5月から6月初めの初夏の頃、色鮮やかな新緑の間に点々とつつじの“くれない色”が風情をそえて、文字通り“花の山”がぴったりである。

やがて盛夏の候になると、花山名物の百足とやぶ蚊に悩まされることになる。百足は良く目立つのですぐに対処出来るが、花山のやぶ蚊の強烈さときたら衣服の上

からでも刺されると、かゆいどころか痛い。蚊取線香が必需品となり、この状況が10月頃まで続く。これでは花山ではなく、蚊山天文台の方が似つかわしい。閑話休題!!

天文台で驚いたのは、水道の蛇口から出る水が赤土と鉄さびの混じった、まるで、オレンヂジュースのような水しか出ない事であった。三谷さんによると、天文台の水源は「稚児ヶ池」の近くに井戸があり、地下水をポンプアップしているが、配管も創立以来のままで、当時は多分鉄管を使っていたものと考えられるので、鉄さびが混じっているのも仕方がない。この水は飲料には適さないので、水洗トイレの洗浄用にしか使っていない。

炊事及び写真処理用の水は、天水を使うようにしている。実は、本館入口玄関の上部に張り出しているコンクリートの天井は、雨水を貯める池の底になっているのだそうで、池には「ボーフラ」の発生を防ぐために「小ぶな」を放してあるとのことであった。

写真乾板を現像する場合、あらかじめ暗室の水道蛇口を余り水流が強くならないように調節して、最低30分ぐらい出しっ放しにしておくと、少し水の色もオレンヂ色が薄まってくる。定着の終った乾板を、バットに入れ流水で5分間ぐらい洗ったら、ハイポ除去液に3分から5分ぐらい浸した後、ハイポ除去液を捨てて、バットに乾板を入れたまま、天水池に直行。手に持った乾板を水中でバシャバシャと、1分間ぐらいすすぎ洗いして乾燥させるという方法で処理されていた。

炊事の時も同じ天水池で、まず水中にいる「ボーフラ」を手の平で追っ払ってから、水を汲み上げておられた。

冬になると、「ボーフラ」はいなくなるかわりに、池に氷が張る事もある。氷といっても、せいぜい3ミリから5ミリぐらいの厚さではあるが、氷を割るという手間が、かかるようになる。

1948年5月、北海道の礼文島で、皆既日食があった時、韓国で観測されて、アメリカへ帰国される途中日本へ立寄られた、彗星観測者として高名な、Yerkes天文台のvan Biesbroeck氏が、花山を訪問された。

三谷さんは、撮影したPlateを見てもらい、激励の言葉を受け、帰られる時に、van Biesbroeck氏のふっくらとした大きな手で握手をしてもらって、大感激したそうである。

筆者は、残念ながら夜しか上山しないのでお会いする事は、出来なかった。

三谷さんが、観測用に使われていた乾板はすべて戦時中のストック品なので、使用期限切れの物ばかりであった。そこで、なるべく箱のしっかりしている物を選び出し、中の1枚を未露光のまま現像して見てカブリの少ない物を使っておられた。ひどいのになると、乾板の縁が10ミリぐらいの巾で、真黒に感光している物もあった。

そうこうしているうちに、こうしたストック品も残り少なくなって来た。三谷さんは教室へ行く度毎に、当時の教室事務長、松永平治氏に、乾板購入の件を頼み込んでいたが、予算のやりくりがつかなかったのか、中々希望はかなえてもらえなかった。しびれを切らした三谷さんは、とうとう自腹を切って乾板を購入された。筆者も「貧者の一燈」になぞらえて、キャビネ判の乾板一箱を寄贈しようとしたが、遠慮深い三谷さんは中々受取ろうとはなさらない。こちらも強引に押付けるようにして受取ってもらった。

この頃の、日本という国は、ほんとうに貧乏なんだなあと思った。何しろ公務員の給与が、月2回に分割して支給されていたのだから。

秋が深まるにつれて、天文台室内は、どこからともなくすき間風が入り込んでくるようになって来る。あちこち室内を見てまわると、窓ガラスにひび割れた物や、完全に割れてしまっている窓もあった。ひび割れた所にはトタン板を当ててあり、ガラスがない所にはベニヤ板がはめ込んであった。

晩秋も終りに近くなると、教室から冬の暖房用の、炭を取りに来るようにと連絡が来る。

教室にはリヤカーがないので、植物教室から借りた。ところが、これがひどい代物で、片方の車輪にはまともなゴムのタイヤがはめてあったが、もう一方の車輪にはタイヤがなく、代わりに荒縄がツタのようにぐるぐるとリムに巻き付けてある。試しに動かしてみると、ガタガタして実に動かしにくい。しかし、文句を言っても仕方がない。あきらめて作業にかかることにした。余り欲張って、たくさん積みこむと、天文台まで登り道ばかりという事を考えるとせいぜい3俵ぐらいが良いのではないか、という事に落ち着いた。残りは又取りに来ることにして、16時頃出発した。荷台を後ろにしてリヤカーを引くより、荷台を前にして押す方が楽だったので、三谷さんと二人で並んでリヤカーを押した。ところが、先に述べたように左右のバランスがくずれたリヤカーゆえ、なかなかまっすぐに進まず、どうしても左へ左へと進んでしまう。結局、積荷を天文台まで運び上げるのに2時間ばかりを要し、けっこう汗をかいて到着すると、もう夕やみが迫っていた。

冬の暖房はこの木炭が主力で、火鉢の縁に足を乗せたり、手をかざしたり。後は500Wのヒーターが、あるだけで、よくあんな事で花山の冬に耐えられた三谷さんには恐れ入りましたとしか、言いようがない。

現今の人達には、とうてい想像も出来ないような劣悪な環境にあって、一人で天文台で生活して、留守番を引受け、小惑星、彗星の写真による位置観測に主力を注ぎ、大いなる成果を上げられたのは、生来の負けん気と、ねばり強さ、几帳面さに、裏付けされた物であったと思われる。

その三谷さんの掉尾を飾る快挙は、1954年1月28日の日没後、南西の低空、水瓶座に、Honda-Mrkos-Pajdušákova短周期彗星の初めての回帰を、世界に先がけて検出された事であろう。この彗星は、最初1948年12月に発見され、短周期彗星である事は

すぐにわかったが、周期は正確に決まっていなかった。したがって1954年の初回帰は、随分計算者を悩ませた予報の困難な彗星であったらしい。

その後しばらくして、日付はハッキリしないが、ある事情の為、三谷さんは、約10年余の永い間奮闘された思い出多い花山天文台を、去って行かれた。

2. 花山天文台の宮本先生

花山天文台は創立以来、第二講座の所属となっていたが、第一講座に変りそうな気配が、1955年ぐらいから感じられていた。

1955年の夏の午後、宮本先生以下第一講座の人々と共に、なぜか第二講座の今川先生も花山へお越しになった。

夕方になって、宮本先生から、月を見たいからドームを開けておくようにと、要望があった。望遠鏡を月に向け待機していると、やがて、宮本先生と今川先生が、望遠鏡室へ上っておいでになった。

観測台上の、両先生の会話を、聞くともなく聞いていると、ご覧になっているのは、どうやら「クリシウム海」の「オニール橋」附近だという事が、わかった。

宮本先生は、天文台が第一講座の所管になった場合、花山の前近代的な観測機器を活かすには、太陽、月、火星の、観測研究以外に道はないとお考えになっているらしい、という事がおぼろげながら見えて来た。

1956年8月火星が大接近し、8月20日、火星面のノア大陸東北端に、世紀の大黄雲が発生した。西へ西へと猛烈なスピードで伸びて行く、大黄雲の先端部を追って、詳細なスケッチと記録を取るべく、宮本先生の大活躍が始まった。このときの研究結果を、まとめられたものが、Contribution No. 71として刊行された。

冒頭にもちょっと触れたように、1955年夏から月の観測に乗り出された宮本先生から、月面の拡大写真を撮るようにと指示された為、夜は先生と二人だけで天文台にいるという生活が、3年ばかり続いた。

おかげで観測の休憩時に、色々なお話しを伺う事が出来た。

1933年、京大に入学された時、元々数学がお好きだったので、ほんとうは数学の方へ進みたかったのだそうである。

ところが天文同好会、現在の東亜天文学会の会員だったのを、山本一清先生が覚えておられて、強引に宇宙物理の方へ引張られたのだとおっしゃった。

花山天文台に下宿されて、夜は望遠鏡をのぞかせてもらい、夜が明けると、教室へ通うという学生生活だったそうである。

その頃、天文台で飼われていた犬を大変可愛がっておられたようで、先生が朝、山を下って行かれると、必らず蹴上の市電停留所までついて来たそうである。

先生が、市電のステップに、足をかけられると、犬自身も、ステップにちょこんと片足を、ふれさせるのが、いってらっしゃいという意思表示らしく、又とことこと、花山へと帰っていったらしい。

1934年9月20日、室戸岬に上陸した台風は、最大瞬間風速60m、いやもっと強くて65mぐらいだったともいわれているが、何しろ測候所の風速計が、60mちょっと過ぎた辺りで吹き飛んでしまったので、正確な事はわからないが、しばらくは世界記録だといわれた。

この猛烈な室戸台風が関西地方を襲い、甚大な被害をもたらした。特に大阪がひどかった。この日は数学の講義があった。先生や学友達は台風の事が念頭にあるので、外の様子が気になって仕方がない。

時々横目で窓の外を見ていると、幹の太さ40cmぐらいの大木が次々に倒れていくので、講義もろくろく耳に入らなかったのに、数学の松本敏三先生は、平然として講義を続けられたそうである。

花山へもどって見られると、宿舎の屋根は吹飛び、大変な事になっていたそうである。

クラシック音楽が、お好きだったようで、戦争中思うようなレコードが、手に入らなくなって来たので、かわりに、シンフォニーのスコアや、ピアノソナタの楽譜を買っていたよと、おっしゃった。

Mozartはいかがですかと聞いて見ると、あまりに流麗すぎて、どの曲も同じように聞こえるから、お好みではないようであった。

その点、Beethovenは、いかにも切磋琢磨し苦労して作曲したように思えるから、こちらの方が自分の感性に合っているように思うと語られた。

これはと思うような論文が出来上がった時は、第九のレコードを聞いて、つかれをいやされていたらしい。

1958年、秋の火星接近の時、先生はスケッチをなさっており、筆者もそろそろ先生と交替で写真を撮るつもりでドームにいた。すると、突然先生が「あれれ、松井君、僕は、ケルベルス運河を、描くのを忘れたのかな。」とスケッチを見せながら声をかけられた。慎重な先生が忘れるような事はなさらないと思いながら望遠鏡をのぞかせてもらうと、ケルベルスは相当濃いヘーズに包まれていて見るのは困難であった。

謹厳実直な先生も、ご機嫌の良い時は、時に、おどけて見せられる事もあった。

3. 飛騨天文台発足の頃

1968年5月から始まる、建物工事に先立って、正確な南北線を出しておく必要がある。地元の業者は、南北線は決めてありますと言っているが、通常のコンパスで出

したものに違いない。
飛騨天文台の位置は、偏角を考慮すると、真北より西へ6°46′ぐらい寄っているから、この偏りを東へ戻さなければならない。したがって、天測により正確な真北を測定して、ベンチマークの位置を表示してくる為に、赤羽さんと飛騨へ出張するように、服部先生から指示された。
そこで、教室の今川先生の所へ行って、セオドライト一式と三脚を借りて来て、使い方を練習して見た。
4月22日にジープで出発し、16時頃に、大雨見の観測小屋へ到着した。
天体位置表で、北極星の子午線通過時刻を調べて見ると、子午線の上通過は昼間になっており、子午線下通過が夜中になっているので、セオドライトを組立てて見てから、夕食の準備にかゝり、ちょっと外を見ると、ガスが出て来たので今夜は観測出来ないかも知れないと思いながら、夕食を済ませてから、しばらく様子を見ることにした。

京都からの長旅の後、夜の観測に備えてセオドライトの作動をチェックする筆者

23時頃、相変わらずもうもうたるガスで、1日目は、とうとう何も出来ずに就寝。2日目にようやく観測出来たが、チェックの為、3日目に確認して、京都へ帰った。
1969年4月頃、60cm反射で観測中ドームを回転させていると、突然、バチバチと音がして青白いスパークが飛んだ。電源のスイッチを切って調べて見ると、ドームの外壁にコンジットパイプがたれ下っている。コンジットパイプの、継ぎ手金具の工作が正確に工作してないので、連結部が外れ落ちて、中を通してある電線が飛び出して、金属部分とこすれ合い、ショートしたらしい。仕方がないので、スリットだけ閉めて、ドームは回転させないで、翌日、業者に連絡する事にした。
次の日、早朝からチェックして見て、更に驚いたのは、避雷装置の配線が未だ完

了してないのには呆れ果てた。

ことほどさように草創期は様々なトラブルも散見された。しかし、以降は順次大型望遠鏡が飛騨天文台に設置整備されてきて、現在の姿は隔世の感がある。歴史を重ねて益々発展することを願っている。

花山の想い出に寄せて

森山 茂
日本大学大学院総合科学研究科および日本大学生産工学部・教授

僕が山元龍三郎先生（当時、地球物理学教室・気象学講座教授）に連れられて、火星観測で高名な宮本正太郎先生を花山天文台の台長室にお訪ねしたのは、修士課程に進学して間もない学園紛争真っ直中の春盛りの候であったと思う。前年、気象学講座での学部卒研テーマとして「火星の気象」をやりたいと申し出、山元先生から文献を戴き、ひと夏信州の山村に籠もって、多くの火星気象学の外国文献を読んだ記憶が今となってはとても新鮮で懐かしい。市場競争原理や有用性などということに汚染されることなく、純粋に学問を、自由にやることに何の矛盾もなかったかつての青春の一時期である。

そのとき、宮本先生からどういうお話があったのかもう覚えていないが、想像していたとおり、穏やかな訥々とした話しぶりの中に山の隠者のような第一印象を持った。そのとき火星を研究しているという鳴海泰典院生を紹介された。それがご縁で、毎週木曜日午後の「惑星勉強会」に参加させて貰った。ヤブ蚊除けの蚊取り線香を焚いた花山の薄暗い地下室で、斎藤澄三郎先生を中心に、惑星研究の院生だった鳴海、岩崎、斎藤良一先輩諸氏とともに、多くの本や論文を読み合った。後に黒河氏も参加されたし、時に赤羽氏や平田氏も話題提供されていたと思う。

我々の研究の発表の場は主に、当時東京・駒場にあった東大・宇宙研での「月・惑星シンポジウム」であった。そこで、われわれの惑星気象学や観測の草分け的研究成果の発表の場を得るとともに、異分野の多くの他大学の研究者と交流できた。林忠四郎先生や永田武先生等々今となっては伝説的な先生方が現役で一堂に会して活躍されていた毎年のシンポジウムは、もはや後にも先にもない実に壮観そのものであった。

花山には、人にも建物にも多くの歴史を刻んだ“佇まい”というものがあった。年季の入ったあの花山の食堂で、宮本先生、服部先生を中心にして皆が揃って昼食や夕食を食べていた大家族的食事風景や、その食事作りをしていた稲田のオッチャンのことを今もぼんやりと記憶している。外様の小生も、あの花山の“大家族制”風景の一端に辛うじて幾度か参加していたのだと思う。ときに思い出したようにぼそぼそと話される宮本先生はやはり昔の大家族の皆の暗黙の中心だったし、もう一つの中心にはいつも色んな酒瓶が厳然として存在していた。セピア色のそんな懐か